4　まとめ

Ａ区・Ｂ区ともに検出した石列・溝などの遺構が、北で東へ約20°前後振るのは、宿内を南北に通る道路に直交あるいは平行して建物を配置していたからであろう。南区の遺構検出面である地山が江戸時代の生活面と考えると、これと同一高さの生活面をＡ区に設室しなければならない。ここには、本陣絵図から建物が建っていて地表面が南北で高さが揃い、段差があるとは考えられないからである。発掘結果ではＡ区東西発掘区が30cmほど低く、この遺構検出面は江戸時代以前の生活面と判断しなければならない。従って石列ＳＸ01は江戸時代以前の遺構になる。

陶器片・土器片の出土は、 AE50区～AJ50区とBM50 区にほぼ集中している。 陶器片・土器片をⅠ14・15世紀、Ⅱ16世紀、Ⅲ江戸時代前半、Ⅳ江戸時代後半、Ⅴ明治以降、と５時期に分け、その分布状況を見るとⅠ期は AE50～AJ50 区に集中し出土遺物の過半数を占めている。この地区には14・15世紀に居住者が存在したことを示唆する。新しいⅤ期の遺物量やⅠ・Ⅱ期に比べてⅢ期・Ⅳ期の出土量が少ない。検出した遺構と出土遺物を考察すると、石列 SX01 が14・15世紀代と考えることが妥当であることを示す。

出土した土器・陶磁器は小破片が多いが、14・15世紀代と考えられるものが多いことは、歴史史料が少ない中世妻籠の解明に手掛かりを与える成果は大きい。銭貨では「寛永通寶」に加えて、北宋銭の発見も興味深い。土壙 SK05 からは銭貨が５枚出土し、ＢＭ区出土の二枚を加えると計７点となる。銭貨が集中して出土することは、この土壙 SK05 の性格を示唆し、この地点が人馬会所の存在したところであり、人馬会所と関係があるのかもしれない。

今回の発掘調査は、本陣の遺構の有無を調べるためであった。検出した遺構の密度は薄い。まず14・15世紀の遺構である石列 SX01 や小穴がある。また明治時代の土壙 SK05 や小穴が散在する。昭和初期の営林署時代の建物基礎や宿舎に関連する溝・建物基礎がある。結論を下すのは、全面的な発掘に委ねねばならないが、今回の調査の所見から言えば、江戸時代の遺構はのこっていない。土器・陶磁器の出土からみれば、江戸時代中期・後期のものがあるが、出土量の多数を占めるには至らず、江戸時代を通じて居住者が存在したことは無視はできないが、本陣の存在を考えれば土器・陶磁器の出土量は極めて少ないと言える。

そこで建て替えや本陣廃絶の時には建物の取り壊し、清掃が徹底して行なわれ、現在まで建物の痕跡どころか遺物をほとんどのこしていない、と考えられよう。あるいは営林署庁舎の変遷課程でも、土地の造成があり、そのことによっても遺構の痕跡は破壊されたかもしれない。